

# 放課後児童クラブと保育所が隣接した環境に関する一考察 ―小学生と園児の育ちに着目して―

相 澤 里 美

A consideration of the environment where a nursery school and  
an after-school children's club are adjacent  
Focusing on the growth of elementary school students and nursery school children

Satomi Aizawa

## I. はじめに

### (1) 放課後児童クラブ

放課後児童クラブは、放課後や学休期間に保護者が労働等により昼間家庭にいない小学生の児童の遊びや生活を支援し健全育成を図る事業である。学童クラブや児童育成室等、地域によってその呼称は異なるが、児童福祉法では「放課後児童健全育成事業」としている。主に小学校内の余裕教室や敷地内の専用施設をはじめ、児童館等において実施され、放課後の子どもたちが安全に過ごせるように見守り、遊びや集団生活の中で健全に育成するとともに、保護者の就労や子育てを支援している<sup>1)</sup>。

仙田<sup>2)</sup>は民間の学童保育施設<sup>3)</sup>の設計を担当した経験から「民間の幼稚園・保育園が学童保育を併設することはきわめて有効」であると考えた。その有効性について「一つは連続性である」とし、「幼稚園・保育園・こども園という幼児施設から小学校という環境につながるができる」こと、「こどもにとっては卒園した園に帰ってくるという安心感がある」と述べている。

そのような安心感のもと、小学生の子どもにはどのような育ちが保障されるのだろうか。また、連続性のある環境は小学生の安心感以外に何をもたらすだろうか。

### (2) 幼児施設から小学校への移行

文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説』（2018）では幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の重要性を示し、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう工夫することが求められている。そのためには幼稚園・保育所・認定こども園と小学校の連携が欠かせない。

神長<sup>4)</sup>は小学校との連携を進めるため、幼児・児童との活動の交流の重要性を指摘している。「交流を通して、幼児は小学生に親しみをもち、小学生は年少の子どもと関わることにより、自己への信頼や自信をもつことができる。活動の交流は、幼児や児童の健やかな成長に欠くことができない体験」であるため「活動の交流は、幼児・児童の双方の視点から実りある活動となるように工夫しなければならない

い」のである。

さらに小学校への移行の際には「幼稚園教員や保育士、小学校教員が、授業や保育を参観したり、合同研修を実施したりして、こうした幼児期と児童期の発達の違いを知るとともに、幼児期から児童期への移行を意識したかわりや、それに応じた教育について意見交換したりして、発達観や教育観を共有することが大切である」と述べている。

### (3) 民間の保育所に併設された放課後児童クラブ

A県B市のC放課後児童クラブ（以下、C児童クラブ）は、隣接するD保育所と同一の社会福祉法人によって開設された。C児童クラブの小学生とD保育所の園児は同じ敷地、主に保育所の園庭で一緒に遊ぶことがあり、保育士が小学生に関わることや児童クラブの指導員が延長保育を利用する保育園児に関わることがある。同一法人内の職員であるため、C児童クラブとD保育所を兼務する職員がいる。さらに、職員が不足する時間帯などはC児童クラブの指導員がD保育所の保育に関わったり、D保育所の保育士がC児童クラブの指導に関わったりするなど二つの施設は日常的に交流する機会が多い環境である。すなわち、「民間の幼稚園・保育園が学童保育を併設」した環境であり、幼保小の接続の際に求められている「幼児・児童との活動の交流」や職員同士の「意見交換」が行いやすい環境である。

### (4) 本研究の目的

本研究では、C児童クラブの指導員及びD保育所の保育士への調査より、放課後児童クラブと保育所が隣接した環境が小学生と園児の育ちにもたらすものについて考察することを目的とする。

## II. 方 法

### (1) 調査対象者

放課後児童クラブの指導員、保育所の保育士、両方を兼務するなど様々な立場から回答が得られるよう、C児童クラブの指導員3名と、C児童クラブでの指導を経験したことがあるD保育所の保育士3名に調査協力を依頼し、そのうち4名から回答が得られた（表1）。4名の対象者は全員、C児童クラブの小学生とD保育所の園児に関わった経験がある。

表1 調査対象者について

	所属	所有する免許・資格	子どもに関わる 仕事の経験年数
a	両方	保育士、幼稚園教諭、放課後児童支援員 認定資格	4年目
b	児童クラブ	小学校教諭、放課後児童支援認定資格	37年
c	保育所	保育士、幼稚園教諭	3.5年
d	両方	保育士、幼稚園教諭、放課後児童支援員 認定資格	45年

### (2) 調査期間

調査期間は2020（令和2）年9月から10月であった。

### (3) 調査内容

質問紙調査では、対象者それぞれの立場から小学生と園児の両方について回答を得るため、「小学生が保育所の施設・設備を利用できることの利点」「保育所と放課後児童クラブが隣接していることにより、小学生が保育所の子どもや保育士と日常的に交流できることの利点」「保育所と放課後児童クラブが隣接していることにより、保育所の子どもが小学生や放課後児童クラブの指導員と日常的に交流できることの利点」「保育所と放課後児童クラブが隣接している環境で課題となっていること、あるいは今後さらに期待すること」という4つの項目について自由記述を求めた。

### (4) 倫理的配慮

研究の内容・目的、期間を記載した依頼書、データの取り扱いや個人情報の保護に関する事項、研究参加の自由等を記載した同意書を同封し、同意の署名を得た。

### (5) データ分析

分析方法として、大谷<sup>5)</sup> <sup>6)</sup>により提唱されたSCAT (Steps for Coding and Theorization) を使用した。この手法はマトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、〈1〉データの中の着目すべき語句、〈2〉それぞれを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明する語句、〈4〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく4ステップのコーディングと、〈4〉のテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析方法である。

## Ⅲ. 結 果

対象者4名から得られた自由記述についてSCTAによる分析を行い、作成したストーリーライン、理論的記述、さらに追及すべき点・課題を示す(表2～5)。

## Ⅳ. 考 察

### (1) 施設が隣接していることの利点と課題

保育所と放課後児童クラブが隣接していることにより、小学生が保育所の園庭を利用し放課後の時間に思い切り体を動かして遊ぶことができる。そこでは小学生と園児と一緒に遊ぶことができる。日本学術会議<sup>7)</sup>においても「子どもは、仲間集団、とりわけ異年齢集団の人間関係のなかで社会力を育む。授乳期を終えるころ以降、子どもは仲間と群れて遊ぶうちに仲間との関わり方等を学ぶとともに、運動能力のような基礎的な力を身につけてゆく」ことから、「子どもが群れる場」の重要性が指摘されている。また、園庭以外にも保育所の施設・設備を利用することができるため、小学生であっても制作したいものに合わせて保育所にある素材・材料を使用することや、保育所の調理室で作った手作りおやつを小学生にも提供することができる。

そして、施設が隣接していることの利点は子どもに限らず保護者にもある。きょうだいのいる家庭であれば、保育所と放課後児童クラブの二つの施設に子どもを迎えに行かなければならず、就労している保護者にとっては負担である。放課後の時間を同じ敷地内で過ごしていれば送迎が一か所で済むため、保護者にとっては利便性の高い環境である。

表2 対象者aのストーリーライン、理論的記述、さらに追求すべき点・課題の一覧

ストーリーライン	小学生が保育園の園庭を使い十分に体を動かして屋外での運動遊びを行うことができる。放課後児童クラブを利用する子どもの多くは小学校では低学年であり面倒をもらう立場であるが、自分より小さい保育園児と関わることにより年長者としての自覚をもち、思いやりのある行動ができるようになる。それと同時に保育士への甘えが許される。保育園児はすぐ近くで小学生の姿を見ることで「あんな風に鉄棒ができるようになりたい」など小学生への憧れをもつ。職員の中には保育所と放課後児童クラブを兼務するという勤務形態の者もいるため、自然と保育園児と小学生との異年齢交流を促すことができている。課題となるのが、体格の異なる小学生と保育園児の安全、放課後児童クラブと保育園の違いや意義について保護者の理解を得ることである。今後も保育園からの情報を活かした指導をしていきたい。
理論的記述	小学生には運動遊びの時間が必要。 小学生は年長者として行動することで褒められたり認められたりするが、年長者として振舞うだけでなく保育士に甘えることもできる。 異年齢交流が促される環境では安全への配慮が求められる。大人にとって利便性の高い環境であるが、子どもにとっての意義を考えなければならない。
さらに追及すべき点・課題	小学校の生活だけでは運動量が足りないのか。 安全に配慮するのは大人か小学生か。小学生にはどのように指導するか。 単に子どもを預けるための場所ではなく、放課後児童クラブは児童健全育成のための施設であること。 他の保育園からC児童クラブに入所する子どもはいるか。いるとしたらどのように情報を得ているか。どのような配慮をしているか。

表3 対象者bのストーリーライン、理論的記述、さらに追求すべき点・課題の一覧

ストーリーライン	屋外で体を動かして遊ぶことの重要性を考えると、保育園の園庭を利用して鬼ごっこやドッジボールをすることができる環境は小学生にとって良い環境である。保育園の行事に小学生が参加したり、放課後児童クラブの行事に保育園児が参加したりするなど、行事を通した異年齢交流ができる。二つの施設の職員による情報交換も可能である。小学生は保育園が近くにあることで日常的に保育園児と関わりことができ、年長者としての自覚をもちたり、年長者としての行動をとったりする。一方、保育士に対する安心感から、思い切り甘えること、何でも話すことができる良さもある。保育園児にとっては小学生が近くにいることで小学校をより身近に感じることができ、小学校就学への期待をもつことができる。保育園から小学校へと自分の生活する環境が変わっても見守られる安心感、卒園後も継続する人間関係は小学校就学を支えるものになるだろう。小学生と保育園児の交流に利点があるものの、期待しすぎることは良くない。保育園児にとって「お兄さん」「お姉さん」である小学生も、まだまだ発達の途中にある子どもである。小学生に求める理想の姿、年長者としての振る舞いばかりを期待するのではなく、幼児期から学童期へと成長することによる行動様式の変化も含め、その様子を長い目で見ていかなければならない。
理論的記述	小学生には運動遊びの時間が必要。 小学生は年長者として行動することで褒められたり認められたりするが、常に年長者として振舞うことを期待してはならない。 保育園児は小学生と関わることにより小学校就学への見通しをもてる。 異年齢交流や情報共有が可能。
さらに追及すべき点・課題	行事は二つの施設の子どもが合同で参加する前提で計画しているか。計画の段階から保育園・児童クラブの両方の職員が関わっているのか。 知り合いがいまま小学校に入学することは子どもにとっても保護者にとっても不安。 保育園児が近くにいることで、小学生が我慢していることはあるか。

表4 対象者cのストーリーライン、理論的記述、さらに追求すべき点・課題の一覧

ストーリーライン	放課後児童クラブが保育園に隣接していることにより、保育園の園庭を使って小学生がしっかり体を動かして遊べる。また、保育園の給食室で作った手作りのおやつを提供することができる。遊具や遊びに必要な素材・材料が豊富にあるなど、小学生にも利用可能な保育環境があることで放課後の活動が充実する。小学生が保育園児のために遊びを考えてくれたことがあるなど、イベントを通した異年齢交流が行われる。イベントの時に限らず、日常的な交流が行われているため、小学生は日頃から保育園児の安全への配慮をしてくれているようである。小さい子が好きで保育園児との遊びを楽しんでいる小学生もいる。保育園の卒園児の様子を放課後児童クラブの職員に伝えることができ、トラブルが起きた際には一緒に対応を考えたりするなど、施設間の連携ができています。そのため保育園から小学校まで長期的な支援ができる。保育園児の方は小学生の姿を近くで見ているため、小学生を目標にした行動をとるようになる。放課後児童クラブを保育園児の遊び場の一つとして利用させてもらいたい。
理論的記述	保育園の環境を利用できると小学生の活動が充実する。 日常的に交流しているので小学生が保育園児の安全を考えている様子である。 保育園と児童クラブの職員で子どもの様子についての情報共有が行われるため、長期的な支援が可能。
さらに追及すべき点・課題	小学生は自分たちと保育園児の発達の違いをどのように理解しているか。 保育園児の面倒を見たいのか、それとも保育園児と一緒に遊ぶことが楽しいのか。 保育園児が小学生に対して興味をもつことは何か。真似したがるのはどのような姿か。 情報共有のために合同の職員会議等を行っているのか。

表5 対象者dのストーリーライン、理論的記述、さらに追求すべき点・課題の一覧

ストーリーライン	小学生がすぐ近くにいることで関りをもてるので、保育園の年長児は小学生への親しみを感じられる。小学生であっても保育園の施設を使うことができるため、十分な活動量による気持ちの発散ができる。放課後児童クラブと保育園が隣接していることできょうだいの送迎の負担が軽減されるなど、保護者の利便性も高い。小学生が保育園児に教えた遊びが保育のなかに展開されるなど、遊びの伝承も行われる。学校では同年齢の子ども同士の関りが多い小学生が保育園児と関わることで、年長者としての行動や年長者としての自覚ができる。施設・設備の共有ができるため、給食室で作ったおやつを提供、行事への合同参加、同じ資格をもつ職員の補い合いなど融通が利く。他の保育園からの受け入れができていない。
理論的記述	日常的に小学生の姿を見ているため、年長児は小学校就学への見通しがもてる。 保育園の施設を利用できるため、小学生が十分な活動を行い気持ちの発散につながる。 異年齢交流により、小学生は自分が年長者であることを自覚し、行動する。 施設・設備や情報の共有、職員の補い合いができるため、施設間の交流が行いやすい。 保護者にとって利便性が高い。
さらに追及すべき点・課題	行事は二つの施設の子どもが合同で参加する前提で計画しているか。計画の段階から保育園・児童クラブの両方の職員が関わっているのか。 他の保育園からC児童クラブに入所する子どもはいるのか。いるとしたらどのように情報を得ているか。どのような配慮をしているか。

しかし、施設が近いことでの課題もある。体の大きな小学生と小さな園児が同じ環境で遊ぶことは、接触してけがをしたり、体の発達に見合わない危険な遊びを園児が模倣してしまったりするなどの事故も起こりうる。同じ場所で小学生と園児が遊ぶことが日常的に行われているのであれば、事故防止のための配慮が求められるだろう。

## (2) 小学生が園児や保育士と関わることの利点と課題

小学生が園児と関わることにより、年下の子に優しくすることや手本となる行動を示すことができ、年長者としての自覚をもてる。「小さい子が好きな」小学生が保育園児と遊べるという回答が得られたが、同年齢の子どもとの集団遊びが苦手な小学生がいた場合も、保育園児と一緒にゆったりとした時間を過ごすことができると考えられる。

保育士と関わることの利点として、保育所の頃から自分のことを知っている大人に遠慮なく甘えられることが挙げられる。発達とともに周りの大人との関係が変化し、甘えられないこともあるのだと推察される。

幼児期の教育は遊びを中心とした総合的な学びであり、幼児の興味・関心に沿って活動が展開される。しかし、小学校以降の教育は教科の内容に沿って学習が進められる。このことについて神長<sup>4)</sup>は「幼児期の教育と小学校教育とでは、幼児期と児童期の発達の特性により、教育の目標や内容、方法、評価が大きく異なる」と指摘している。その中でも特に、子どもに対する評価の仕方が変わるということは、小学校就学を機に自分に向けられるまなざしが変わるということではないだろうか。小学校就学後も幼児期と変わらない目で自分を見てくれる大人は、子どもにとって重要な存在であると考えられる。このように、保育園児にとっては「お兄さん」「お姉さん」である小学生であっても、まだ成長の途中にある子どもであり、安心して大人に甘えられる時間が必要である。そのため、「過度な期待はよくない」という回答が得られたように、小学生に対して常に小さい子に優しくすることや小さい子にとっての憧れやモデルであることを常に期待してはならないだろう。

## (3) 園児が小学生や放課後児童クラブの職員と関わることの利点と課題

園児が放課後児童クラブを利用する小学生と関わることで、遊んでもらえる、遊びを教えてもらえるという利点がある。また、一緒に遊ぶ中で小学生に対する憧れの気持ちをもつようになり、難しいことにも挑戦しようとする意欲が芽生え、小学生になることへの見通しをもっていることがわかった。小学校就学後にも、保育所の園庭で一緒に遊んでくれたお兄さん・お姉さんがいることで安心できるだろう。D保育所を卒園してC児童クラブに入所することになれば、指導員とも顔見知りであるため、保育所から放課後児童クラブへの移行もスムーズに行われると期待できる。

今回の調査において、4人の対象者から園児と小学生、放課後児童クラブの職員との関わりにおける課題は得られなかった。放課後児童クラブの小学生と関わる園児は延長保育を利用する子どもであり、人数が多くないためだと推測される。しかし、「年々長保希望のご家庭が増え」という回答から、今後は延長保育の時間帯に小学生と関わる園児が増えることが予想されるため、園児の課題が出てくるとも考えられる。

## (4) 職員同士の連携・情報共有

幼稚園・保育所と小学校の連携について、神長<sup>4)</sup>は「幼稚園、保育所、小学校の教職員が集まっても子どもの見方や保育・授業の進め方が異なるので、どう連携していったらよいかわからないという声

もある」と指摘している。ところがC児童クラブとD保育所は子どもの見方が違う者同士の連携・情報共有とは異なり、保育士資格または放課後児童支援員認定資格という、遊びと生活を中心に子どもの育ちを支えることにおいて共通する資格をもっている。そのため連携や情報共有が行いやすいのだと推測される。保育所の行事に小学生が参加する際、あるいは児童クラブの行事に保育園児が参加する際には、連携・情報共有が行いやすいという利点を活かし、計画する段階から双方の職員が関わることもできるだろう。

今回の調査では明らかにならなかったが、情報共有は保育所と放課後児童クラブの合同の職員会議のような場において行われるのか、それとも各職員から園長・施設長のもとへと情報が集約されるのだろうか。あるいは、同じ資格をもつ者同士、同じ法人の職員同士であるために話しやすく相談しやすい雰囲気があり、日常会話のようにして行われるのだろうか。連携・情報共有を行う仕組みについても調査をしていきたい。

### (5) 他の保育所からC児童クラブへの入所

対象者からは「他の園からの子を受け入れてあげられない」との回答が得られたことから、現在のC児童クラブはD保育所の卒園児を中心に受け入れていると推察される。しかし、他の保育所からC児童クラブに入所する子どもがいた場合、その子は他の子どもや施設の職員と保育所での生活を共有しておらず、既に来上がった人間関係の中に途中から参加することになる。他の保育所から入所してくる子どもの情報収集・共有のあり方や人間関係への配慮についても検討が必要になってくるだろう。

### (6) 小学生と園児のトラブル

施設が隣接していることの課題としても述べたように、体の大きさが違う小学生と園児と一緒に同じ園庭で遊ぶためには安全への配慮が必要である。屋外で「思い切り」遊ぶことと、体の小さい園児の安全を考えることは、両立しないこともあり得る。

そして、小学生と園児の違いは身体の大きさだけではない。遊びのルールや言葉に対する理解力の差などからトラブルに発展する可能性もあるだろう。対象者からは「日常的に、同じ園庭で小さな子と遊ぶ」ため、「配慮したり、考えたり」してくれているのではないかという回答が得られたが、小学生は自分たちと園児の発達の違いについて、どのように理解しているのだろうか。小さい子と関わるための配慮など、必要に応じて小学生に伝えていく必要があると考えられる。

### (7) 大人の利便性と子どもの育ち

大人の側の視点に立てば、施設が隣接しているため保護者の送迎の負担が軽減される、同じ法人の中で人的・物的環境を共有しながらやり繰りできる、情報共有がしやすいという利点がある。

しかし、「施設が隣接している」「子どもの様子を把握しやすい」という利便性だけが強調されてはならず、子どもの育ちを保障する環境として議論し続けなければならないと筆者は考える。植木<sup>8)</sup>はOECD加盟国における国際的な動向から日本の児童健全育成の概念を再検討し、「ニーズ対応型アプローチから、権利基盤型アプローチへの変容」が「普遍的な健全育成概念の視点となる可能性」を示唆している。つまり、子どもを大人の目線から「保護の対象」として見るのではなく、子どもの目線から能動的に育つ存在として見るよう健全育成概念の転換が求められているのである。

保護者が「保育所からの延長でクラブに預けてしまうのではなく、放課後児童クラブのあり方（意味）を理解して利用されるように」という回答が得られたように、D保育所からC児童クラブへ入所す

ることを「流れ」としてとらえるのではなく、子どもにとっての施設の意義を理解したうえで利用してもらうことも必要である。保育所と放課後児童クラブが隣接している環境は異年齢交流を深められること、小学生の活動を広げる環境が近くにあること、長期間にわたって継続する人間関係の中で安心して小学校生活を送れるなどの子どもの発達に必要な側面をもっている。施設の利便性に偏らず、子どもの育ちを保障するための環境として施設を理解し運営していくことが重要だと考えられる。

## V. 調査における課題

今回の調査では、所属や勤務形態が様々であったとしても4名の対象者がすべて同じ法人の職員であった。幼稚園・保育所・認定こども園が放課後児童クラブを併設している環境が子どもたちの育ちにもたらすものを検証するためには、今回の調査結果をもとに新たな質問紙を作成する等、複数の施設を対象に調査を行う必要があると考えられる。その際は立場や経験年数、所有している資格による違いからも検討していきたい。

## 謝辞

この調査に協力してくださった放課後児童クラブ、保育所の先生方に心より感謝いたします。

## 注および文献

- 1) 『児童館・放課後児童クラブテキストシリーズ①健全育成論』一般財団法人児童健全育成推進財団（2014）
- 2) 仙田満『こどもを育む環境、蝕む環境』朝日新聞出版（2018）
- 3) 放課後児童クラブに同じ。
- 4) 神長美津子「『小学校との連携』その現状と課題」永井聖二・神長美津子編『幼児教育の世界』文学社（2011）
- 5) 大谷尚「SCAT：Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」, 感性工学10(3) pp. 155-160（2011）
- 6) 大谷尚『質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会（2020）
- 7) 日本学術会議（2008）「提言 我が国の子どもの成育環境の改善にむけて - 成育空間の課題と提言 -」  
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-t62-15.pdf>（閲覧2021年1月31日）
- 8) 植木信一「日本の健全育成の概念の再検討—権利基盤型アプローチに着目して—」人間生活研究. 第7号. pp. 33-44（2016）